

編集後記

同文書院記念報第十八号をお届けする。

本号は四本の作品を収録した。

まず、三田良信氏（書院四二期）の報告は、地元金沢の常福寺の所蔵史料目録作成にかかわり、第十四代住職北方心泉が後述するように清末の文人らと交流した時に得た文物の存在や「南京同文書院」の設立にかかわったことを知ったこと、またそれに関係して心泉の書を所蔵する野村宅で荒尾精の書幅を発見したこと、その背景には荒尾精と野村喜一郎が『共潤会雑誌』を介して関係がみられたこと、など興味深いご報告をいただき収録させていただきます。

また、同じく三田氏の「南京同文書院設立の経緯」は、常福寺の所蔵史料目録の作成にかかわる中で、北方心泉が上海の東本願寺上海別院在院中にさらに南京へも進出して「金陵東文学堂」を開設したこと、またその折、東亜同文書院開設を中国の要地である南京に日論んだ東亜同文会近衛篤磨理事長からの「金陵東文学堂」を譲与してほしいとの依頼を断ったこと、しかし、東亜同文書院を新たに南京に開設するに当っては北方心泉が清国の劉総督との親しいつきあいの中で、近衛理事長と劉総督との間での話合いにより南京同文書院の開設が可能になったこと、などを明らかにできた、とする興味深いものである。

この作品は三田氏の私家版として出版された「一か八か」に収録されたものであり、広く目にふれないので本号に転載させていただいた。

次の西好隆氏（書院四二期）の作品も同様な状況にあり、転載させていただいた。元のタイトルは「日中憂国風雲録」で、戦後の神戸で日中間の貿易取引が行えなかった時代に、神戸の華僑の貿易商達と組んで日中間の貿易を実現させるプロセスを描いた文字通り風雲録である。そのうち、東亜同文書院入学を志し、入学した書院で

の生活やその時代背景の記述が大変興味深いのでここに収録させていただいた。

三本目は第十六回東亜同文書院記念基金会授賞式の様子を掲載した。今回は上海交通大学校史編纂室の責任者である葉敦平先生が受賞された。霞山会の中国改革開放後のご尽力もあって、上海交通大学は霞山会と友好関係を築いてきたが、その中で校史編纂にかかわり、中国で記録された史実にもとづいた東亜同文書院についての日中間での共同研究をすすめられた。その成果をあげるとともに書院への相互理解の進展にも大きく寄与されたことへの表彰となった。共同研究の日本側の代表は筆者が担当したが、葉先生の人間的なあたたかさにもふれ、葉先生の受賞は大きな喜びである。

四本目は毎号続いている武井氏による記念センター所蔵となった寄贈資料目録であり、同氏の努力の成果である。最後に記念センターの活動記録を掲載した。活発化している当センターの多様な活動を知っていただけたなら幸いである。

以上、編集の立場から各作品を紹介させていただいた。

二〇一〇年度も多彩な活動をセンターは予定している。全国巡りの展示・講演会は、京都（七月十七〜十八日）、米沢（八月二八〜二十九日）、名古屋（十一月二七〜二十九日）を予定している。そのほかシンポジウム、講演会、研究会、出版活動などがそれである。それぞれにご理解いただきご協力いただけたらと願っている。

また書院卒業生や関係者による本誌への投稿もお願いし、本誌をさらに盛り上げていただいたらとも願っている。

二〇一〇年四月十五日

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久